

廉塾の今昔に懐いを馳せて

本会元副会長 井上 謙一

昭和十四年春、神辺北小学校四年生へ転入学した。住まいが廉塾の近くで、これが菅茶山翁を知るきっかけとなった。しかし、廉塾にはご当家が住んでおられ、門前より邸内を垣間見るだけで、子供の私にはまったく関心はなかった。

時は流れて、平成七年凶らずも神辺町より教育長の依頼を受けて、神辺町の教育・文化にたずさわわり、菅茶山顕彰会の活動を知った。教育長を辞すると同時に、顕彰会に入会して活動に加わった。茶山翁の「筆のすさび」の現代語訳には一年餘の歳月を費やし、富士川英郎氏著「菅茶山」も熟読した。

顕彰会の役職を終えて十年、藤田会長からのお声かかりもあり、久々に廉塾に出かけて、ひと時感慨に耽った。

歳老いて今は何のお役にも立たなくなつた我が身と廉塾の姿を重ねて憶う時、過ぎて再び帰らぬ疎水にことよせて拙詩を作りました。

廉塾覽古

廉塾覽古

墨客尋翁解旅装 墨客翁を訪ね 旅装を解く
交歛一夕意軒昂 交歛一夕 意軒昂たり
青衿誦読無今聴 青衿の誦読 今や聴く無し
惟有當年古塾堂 惟だ 当年の古塾堂 有るのみ
令和三年師走 井上 水月

(大意)

文人墨客が茶翁を慕って、廉塾に旅装を解いた。一夜は酒交と学問、風物などの話題で大いに盛り上がった。

しかし、今は書生たちの誦読する聲を聴く事もなく、惟、往年のままの廉塾の古い建物が有るのみである。